

ポピュラー音楽に対する価値観についての歴史研究
-音楽科教育における大衆音楽批判からポピュラー音楽の受容へ-

庄司 健人

かつて音楽科教育において大衆音楽は批判の対象であった。ポピュラー音楽がさまざまな形で学校現場に入ってくるようになるのは1970年中ごろからであるとされる。この大衆音楽への嫌悪や排除は、日本においても古くから知識人などに多くみられる価値観の一つであるといえるだろう。明治後期以降、本格的に日本全国に浸透していったとされる西洋音楽に基づく音楽科教育は、様々な形で大衆音楽批判を行ってきた。戦前や戦後すぐの音楽科教育関係の書籍を開くと、大衆音楽に対する嫌悪やその排除を論じるような文章を多く見つけることができるが、時代を下るにつれて特定の音楽をあからさまに非難することや嫌悪することはあまり見られなくなっていく。

中でも大衆音楽の曲調が頹廢的であるとするような批判がある。これは基本的には、西洋古典音楽における長調を「健康的」な音楽とし、それとは反対に日本情緒や土俗的な情念のようなものを表現する短調の音楽を「頹廢的」「卑俗」などと批判するものである。進んだ西洋の健康な長音階の音楽と、遅れた日本の頹廢的な陰旋法や短音階による音楽という二項対立の図式が存在していたのである。この二項対立は、覇権国家であった欧米諸国に対して文化的に憧れ、非西洋圏の文化をもつことに対して劣等感を抱くという植民地主義（コロニアリズム）の一状況として説明できるだろう。

本発表ではこのような批判言説がいかにしてその力を失っていったのかということについて扱う。このコロニアリズムの図式の変化について明らかにするため、2人の音楽学者、園部三郎と小泉文夫による歌謡曲論を中心に考察する。音階を軸にした彼らの論考は、歌謡曲の中に日本的な性質を見出したが、その日本的なものに対する評価は1960年代から70年代にかけて逆転していったのである。